

昔



◀(上)奥は天野川堤防。左の白い建物は旧公共職業安定所。(右下)まんが(馬鍬)を引っ張り代掻きをする牛。いずれも西禁野の橋本勲さん(80歳)が現在の枚方消防署や枚方郵便局付近で撮影(昭和29年)。



今



▲耕運機のエンジン音を響かせ土を耕す大村さん。

働く牛が農家の「宝」だった

大垣内の稲作

天野川左岸に位置する大垣内町辺りは豊かな水に恵まれ、古くから稲作が行われてきました。現在は消防署や郵便局などが建ち並ぶ場所も、昭和20年代は水田が一面に広がっていました。天野川から湧き出る水をためた池が堤防沿いにいくつもあり、農家の人々はポンプの代わりに水車を踏んで田へ水を引いていました。大垣内町で農業を営む大村宗治さん(75歳)は「きれいな水だね。禁野橋近くにあったうどん屋はその水を使って製麺していましたよ。川ではエビをよく獲ったなあ」と懐かしみます。

田植前は牛が大活躍。「まんが」と呼ぶ農機具を引っ張って田を起こしたり重い荷物を運んだり、貴重な労働力でした。「牛は農家の宝でした」と話す同町の大矢作市さん(87歳)は「農繁期には草だけでなく麦やおからで精を付けてね。正月は雑煮も食べさせましたよ」と、大切に育てた牛について振り返ります。

当時の農家は、米はもちろん野菜や卵、みそなど全て自宅で賄う生活。「ほぼ自給自足でした。いたって粗食で、今のようメタボの心配なんて考えられなかった」と大村さんは話します。

30軒ほどが農業を営んでいた大垣内のだかな田園風景は、昭和40年代の官公庁団地の造成など開発が進み、その姿を大きく変えました。それでも数軒が現在も農業を営み、牛に代わるトラクターや耕運機がエンジン音を響かせながら土を耕しています。

(平成24年6月号)